

水稻病害

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
いもち病 (葉いもち)	—	並	(1) BLASTAMによる判定では、6月20日以降に県内の一部の地域で、感染好適条件が出現したが、全県では出現していない。(±) (2) 取置き苗の放置は全県では減少傾向にあるが、本年も取置き苗での発病が確認されている。(±) (3) 平年並に葉いもち予防剤が広く使用されている。(±) (4) 水稻の葉色値（6月23日現在、各農業改良普及センター調べ）は平年並である。(±) (5) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
紋枯病	—	並	(1) 前年の発生量は平年よりやや多かった。(＋) (2) 水稻の生育量（6月23日現在、各農業改良普及センター調べ）は平年を下回っている。(－) (3) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
稲こうじ病	—	並	(1) 前年の発生量は平年並であった。(±) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

〇いもち病は、気象条件により急激にまん延するので、今後の情報に注意し、圃場の観察と早期防除を最重点に万全の対策をとりましょう。

【いもち病】

- (1) 発病した取置き苗や本田持ち込み等の伝染源のある圃場とその周辺では、病勢の進展が速く、ずりこみ等の大きな被害につながる事が多いので、地域で特に注意する。
- (2) 葉いもち防除
 - ① 予防剤(箱施用剤、水面・投げ込み施用剤)を使用した場合
予防剤を使用した場合でも、圃場を観察し、本田で発病している場合は直ちに茎葉散布を行う。水面・投げ込み施用剤の処理が遅れた場合は特に注意する。
 - ② 予防剤を使用しなかった場合
圃場をよく観察し、発生を確認したら直ちに茎葉散布を行う。
- (3) 穂いもち防除
穂いもち予防剤の施用にあたっては、生育状況を観察し、防除時期を失しないように注意する。なお、葉いもちの発生が見られるところでは、粒剤施用前に茎葉散布剤で防除を行う。

【紋枯病】

- (1) 茎葉散布の場合：穂ばらみ末期（7月末～8月上旬）の発病株率が、早生種 15%、晩生種 20%以上の場合は防除を行う。
 - (2) 粒剤施用の場合（前年多発圃場）：防除適期 出穂 25～15 日前 モンカット粒剤
出穂 20～10 日前 モンガリット粒剤（稲こうじ病にも効果有）
- ※いもち病防除剤との混合剤を使用する場合は、剤によって散布適期幅が異なるので注意する。

【稲こうじ病】

- (1) 前年多発した圃場を中心に防除する。特に、穂ばらみ期に雨天が続くと多発するので注意する。
- (2) 銅剤およびトリアフロアブルの効果が高い。

【ばか苗病】

- (1) 圃場を観察し、発生を確認した場合は、株ごと抜き取って焼却または土中に埋めるなどして処理する。

水稻虫害

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点米 カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	第1世代 やや早	第1世代 並	(1) 有効積算温度から算出されるアカスジカスミカメ第1世代成虫の羽化盛期はやや早い予測。 (2) 7月の気温は平年並か高い予報。 (3) 6月中旬のすくい取り調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。 (-) (4) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。(+)
コバネイナゴ	-	やや多	(1) 6月中旬のすくい取り調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。(+)
フタオビコヤガ (イネアオムシ)	-	第2世代 並 (平年少発生)	(1) 6月中旬のすくい取り調査では、第1世代幼虫の発生圃場率は平年より低かった。(-) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生に好適な条件である。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【斑点米カメムシ類】

- (1) カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道などでイネ科植物（イタリアンライグラス、スズメノカタビラ等）が出穂しないような管理を徹底する。また、水稻の出穂15～10日前までに畦畔や水田周辺の雑草などを地域一斉に刈り取る。
- (2) 本田内にヒエ類、イヌホタルイ、シズイ等が発生している圃場では、これらの雑草がカメムシ類の発生源となり、薬剤防除の効果が十分に得られないので、本田内の除草を徹底する。
- (3) なお、斑点米カメムシ類の発生状況等については、今後発表する情報を参考とすること。

【コバネイナゴ】

- (1) 一般には防除は不要であるが、幼虫が多発している場合には、7月中旬頃までに畦畔と畦畔際2～3mの水田に薬剤を散布する。
- (2) 移動性が高いため、個々で防除すると他の圃場へ移入する場合があるので、地域で一斉に防除する。

【フタオビコヤガ（イネアオムシ）】

- (1) 一般には防除は不要である。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。